

## 平成19年の活動

### 1. スリランカよろず相談窓口事業

#### (1) スリランカにおける現地法人設立のお手伝い

株式会社 D 社のスリランカ現地法人設立のお手伝いをし、平成19年末に設立の運びとなった。現在も継続して、そのスリランカの子会社で働く社員の育成に協力している。スリランカから日本に来て一定期間働き、本国に帰れば働く場所もなく、日本での経験は何の役にも立たず、ただ金のためだけに日本に来るというのでは、あまりにも惨めである。若いときに日本で働き、ある年齢になったらスリランカの関連企業で働くことができるようにしなければならないという D 社の考え方に共鳴し、何とかスリランカに現地法人を作っていただきたいとお願いをした。これは、不法滞在をしなくてもいい環境作りに我々も関わって行きたいという思いからである。D 社とのご縁は、5年前に、現在スバ・ランカ協会のスリランカ事務所になっているニッタンプワの僧院学校で、D 社の元社員であったというスリランカ人と出会ったことによる。彼は、私に D 社の会長さんにスリランカのお土産を渡してくれと依頼した。そこで私はそれを届けに D 社に赴いたという次第である。今後もこのご縁を大切にしていきたいと思っている。

#### (2) 日本における滞在ビザの取得に関する助言

会員の方の依頼で、専門学校での勉学を中断せざるを得ないスリランカ人学生がいるので何とかならないかとの 이메일が届いた。聞けばそのスリランカ人青年は多額の金を支払い、1年分の授業料と居住費がまかなえると思っていたが、来て見たら半年分でしかなく、あと半年分を再び支払わなければならないそうである。スリランカの仲介人にだまされていたということになる。父親が事業に失敗し（後でわかったが、津波の被害を受けてのことであるとのこと）、送金ができない状況で、本人はアルバイトで稼ぐしかなかったために、学校からドロップアウトした。このままでは不法滞在になってしまうので何とかならないかとの相談であった。専門学校の学生は留学ビザでの滞在であるが、実際には、滞在有効期間内であっても、3ヶ月以上教育機関に所属せず教育を受けていなくと、ビザは無効になってしまい、留学ビザの延長は不可能となる。いろいろと情報を集め検討を重ねたが、最終的には C 大学に聴講生として受け入れていただいた。これで留学ビザの資格を維持でき、延長が可能となった。結果的には、この学生は、不法滞在しないで、有効期間内にスリランカに帰国した。

## 2. スリランカの公共トイレ・井戸再建事業

平成19年では、トイレ・井戸の再建はできなかった。平成20年には、寄付を募りトイレを1基、再建したいと考えている。(津波で破壊されたトイレと再建されたトイレ：写真と呼びかけ文)

## 3. スリランカ人を対象とした教育振興、人材育成及び雇用促進事業

### (1) スリランカ・ケーゴール県ゴム農園における児童への支援

会員の水野寿夫さん(碧南幼稚園理事長)の仲介でスズキ教材さん(高浜市)から児童の体操服やエプロンを大量に寄付していただいた。協会の費用でそれらを輸送し、協会のスリランカ事務所のあるヴィディアナンダ僧院学校のインドラナンダ師に託した。師は、これらを、ケーゴール県ゴム農園における児童に配布することにした。この農園にはインド・タミル人労働者が多く働き、その子供たちが貧しさと闘っている。こうしたタミルの児童をシンハラ人僧侶であるインドラナンダ師が支援することは、民族紛争に悩むスリランカ社会にとって意義のあることであると考えられる。

### (2) スリランカ南部農村アクレッサにおける幼稚園教育の支援

スリランカでは、近年増加の傾向にあるインターナショナルスクールを除いて、小学校から大学まで授業料は無料であり、すべて政府立(国立)であり、国がすべての経費を拠出している。これに対して、幼稚園はすべて私立であり、父兄の負担でまかなわれている。都市部では、現金収入の多い家庭が多く問題はあまりないが、農村部では、授業料を多くは望めず、かなり厳しい経営状態にある。日本からの幼稚園支援は大半が都市部に集中しており、農村部、特にコロンボから離れた地方では極めて稀であるといつてよい。スバ・ランカ協会は、コロンボから離れた南部地方の農村の幼稚園を支援したいと思っている。マータラ市の近郊農村にある現地NGO<ナーウィマナ南農村開発基金>をカウンターパートとし、その関係を通して、現地の真に求めているものに対応でき、無駄のない支援をしていきたいと考えている。大岩がこの12月3日に、現地幼稚園を視察した。ある幼稚園では井戸がなくもらい水をするしかない状態にあることがわかり、パイプ井戸を寄付した。またロッカーを2つ贈呈した。(井戸のない幼稚園：写真と呼びかけ文)

### (3) 「産業起こし」による雇用の促進

#### ① スリランカ産アンスリウムの輸入促進

スバ・ランカ協会副会長の佐々木恭一さんが販路を確保し、スリランカ人輸出業者を指導し、スリランカのアンスリウムの日本への輸入を可能にしようとしている。さまざまな問題が生じている。一口で言え

ば、当該スリランカ人業者の商売に対する基本的な理解の不足が障害となっている。まずは人材育成を優先しなければならない。何度か輸入を繰り返す中で、利益を生み出していくことになるだろうと思う。現地に行って指導をしていく必要性を感じている。アンスリウムの栽培農家が200軒ほど関わっており、輸入が軌道に乗ることで彼らの生計を支えることができる。(スリランカのアンスリウム：写真)

## ② バティックのぼりの製造

スバ・ランカ協会副会長の佐々木恭一さんが販路を探し、神社仏閣で使用する「のぼり」をスリランカで製造できないか模索している。今のところ、スリランカにおいて、のぼりの片面プリントは可能であるが、両面に色を出すことができない。これを可能にするためには資金が必要になる。一方、バティックでは、両面に色を出せるが、白地の文字に、赤い色の細かい筋が残ってしまう。これは、ろうけつ染めであるバティックの特徴であるのでやむを得ないが、のぼりとして商品にはならない。そこで白地に色が入らないようにするには、インドネシアのバティック技術を取り入れる必要がある。この点について、前学泉大学教授の塚本玲子先生に教えていただいた。インドネシアでは、白地に抜くためには、ろうではなく、のりを使っているとのことである。スリランカにおいても、ろうではなくのりの使用を考慮しなければならない。近年、スリランへの観光客は激減しており、バティック工場はどこでも営業不振に陥っている。工場では多くの女性が働いている。こうしたバティック工場主であるヘンリーさんを支援することで雇用機会を維持あるいは拡大していけると考えている。(バティックのぼり：写真)

## ③ 水晶彫刻

スリランカ・ニッタンプワ市に住むアリさんは、仏塔のミニチュアの先端につける水晶柱の加工職人である。彼は、近在の職人のまとめ役であり、多くの職人が彼のものに集まる。アリさんを支援することで、多くの職人に仕事を供給することが可能となる。水晶を丸型球形に研磨すれば数珠となり、さらに大きな球形にすればお守りとなり、日本において販売の可能性が高い。現在、日本で販売されている数珠の大部分は中国製という。中国との競争は大変であるが、スリランカでも可能性があるのではと考えた。数珠の製造には、球形に荒削りをする丸型研磨機とさらに磨きをかけるバレル研磨機が必要となる。東京日野市のイマハシ製作所の見積もりによれば、丸型研磨機だけで60万円ほどである。バレル研磨機はいくらになるかまだ見積もりが出

てきていないが、いずれにせよ、会費でまかなえる金額ではない。どこかから寄付を引き出さなければならない。(アリさんとその仕事風景：写真)

#### 4. 日本語・日本文化普及、教育・技術指導等に係るボランティア支援推進事業

##### (1) 国語辞典、漢和辞典のサバラガムワ大学への送付と贈呈

サバラガムワ大学 (<http://www.sab.ac.lk/indextt.htm>) は、スリランカの南西部山地にあり、サマナラ・ウェワ・ダム(蝶の貯水湖ダム)の建設時に、セイロン電気公社が用いた住宅を大学に転用することから始まった。1991年に転用が決まり、翌年から授業が始められた若い大学であり、その社会言語学部現代語学科のコースとして日本学コースがあり、日本語センターがJAICAの支援で建設されている。この日本学コースの学生に国語辞典・漢和辞典を贈呈した。3年生の後期に、卒業論文を日本語で書く学生がおり、平成18年には、日本とスリランカの関係、日本人の葬送儀礼、紙芝居と日本の幼児教育、黒沢明とサッチャンドラなどのテーマで卒論を書いた。毎年20名ほどの学生が入学するため、今後も継続して辞書が必要である。またスリランカには、2007年11月現在、サバラガムワ大学を含めて37の日本語教育機関 (<http://www.lk.emb-japan.go.jp/eg/contents/culture/LanguageInstitutesMain.htm>) があり、こうしたところにも国語・漢和・和英辞典を贈りたいと考えている。(辞書を手に喜ぶ学生；写真と呼びかけ文)

##### (2) 日本語ボランティアのスリランカへの招へい

スリランカにおける日本語教育機関37のうち、21が公立学校である。大半が、13年生までの生徒をようする大きな学校である。主として大都市に集中している。こうした既に日本語のクラスのある大学校ではなく、田舎の普通の学校において日本語教育を始めるために、日本からの日本語教育ボランティアの先生を招へいしたいと考えている。12月にクルネーガラ県のそうした農村部の学校を視察してきた。今、地元の教育委員会と協同して、日本シルバーボランティアーズから人材を派遣してもらうように計画している。11年生のOレベル試験の受験対策として、その受験科目である日本語を9年生から教えるプログラムを考えている。(クルネーガラ県農村の学校：写真)

#### 5. スリランカの物産の紹介と普及事業

## (1) スリランカ紅茶の配送

今回、スバ・ランカ協会が、配送する紅茶は、1841年創業、イギリス王室御用達のマックウッド社ラブカリー茶園の紅茶ブローケン・オレンジペコー（BOP：紅茶の枝葉の2番目の葉であるOPを細かく砕いたもの）200gです。この紅茶はスリランカを訪れる観光客も一般の土産物屋では買い求めることのできないという貴重な品です。30年来のスリランカ人の友人ダルマさんの話では、コロomboで単一の農園からの紅茶を買えるところはマックウッド社だけであり、他はオークションで買い付けた複数の農園のものを混ぜて売っているとのことである。ブレンドで良い味が出ることも勿論あるが、その反面、どのようなものが混ぜられているかは信用するしかない。その点、単一農園の紅茶は当たりは外れないと思う。しかも、このマックウッド社ラブカリー農園の紅茶はとにかく美味しい。一度飲んでみればわかるとおもう。（ラブカリー農園とBOP：写真と呼びかけ文）

## (2) カシューナッツのお土産

11月の末から12月初旬にかけてスリランカに行き、そのお土産に、10kg買って来たカシューナッツを会員に贈呈した。紅茶に加えて、今後、このカシューの普及にも努めて行きたいと思っている。スリランカのカシューの木は、500年前に、ポルトガルが海岸部を支配した時に、砂防林として植えたのが、始まりとされている。栽培目的ではないので、無農薬の自然のめぐみそのもの。あぶらで炒めて塩をかけて食べるのが一般的で、日本のコンビニでもこうして売られているが、生のまま80gを、電子レンジのレンジという項目で、2～3分調理し、一度取り出して、裏返して、もう一度2分ほどチンすると、うっすらと焦げ目がついて、あるいは、白色のまま乾燥する。あっさりした味になり、美味しい。あるいは、生のまま料理にも使える。

友人のダルマさんの話では、40年ほど前の小学生のころに、よくこのカシューを拾いに行き、それをお母さんが売ってくれて、シンハラ正月の晴れ着を買ったという。当初は海岸部にあったカシューも何百年の間に内陸部にも繁殖するようになった。ダルマさんの村は内陸部クルネーガラ県にある。シンハラ新年は4月13日ころであるが、その前の3月ころに、カシューナッツの木には実がなり、熟す。熟すと果肉の部分（カシューアップルという）が赤くなり、その先端にこげ茶色の皮に包まれた実がつく。この果肉は鳥の好物であり、特にこうもりは好んでこの果肉を食べる。3月ころ、こうもりは夜カシューをくわえて、みな同じ木に集まり食す。何百羽と集まる木があり、

翌朝その木のしたには、こうもりが食い残した実が落ちている。シンハラ語で、「こうもりの集まる木」と呼ばれる木が、カシューの生える村には必ずあるのだそうである。朝早く、誰よりも早く、こうもりの大木の下に行き、カシューの実を集めるのが、3月の子供たちの日課であったと、ダルマさんはなつかしげに話していた。各村をまわり、子供たちが集めたカシューを買いにやってくる人がいて、両親から買って行く。特に母親は、ノートに子供たちが集めた量と売れた値段を書いておき、シンハラ新年の前に、子供たちに言って晴れ着をかい、残りはいわゆるお年玉として子供たちに与えるのである。シンハラ新年の風物詩としてのカシューのお話しであった。集められたカシューは熱して皮をはぎ、中身をそのまま生か、油で炒って売りに出す。カシューを加工する場所は、カシュー村と呼ばれ、協会の事務所のあるニッタンプワの近くにある。(カシュー：写真)